

2017 年度点検・評価シート

※下記の指摘事項、課題を踏まえて、Ⅱ点検・評価 Ⅲ【達成目標】欄を記述してください。

（進捗状況を【現状説明】に記述し、必要に応じて新たに【目標】を設定する。）

2016 年度大学評価（認証評価）結果指摘事項 <概評> ・進路支援の方針にある「体系的なキャリア教育を実施」の観点から、全学共通科目と各学部設置のキャリア教育科目との体系化が期待される。
2016 年度外部評価委員会指摘事項 【特筆すべき事項】 ・「基礎教育科目」として多くの外国語科目が提供されていることは、グローバル化時代や異文化理解などの視点からも、高く評価できる。
前年度からの課題 （2016 年度点検・評価シート IV 次年度への課題 より転記） なし

Ⅰ 評価項目・担当部局

対象部局	外国語学部
評価基準 4	教育内容・方法・成果
中項目 4-2	教育課程・教育内容【自己評価 A】
点検・評価項目(1)	4-2-1 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。
評価の視点	必要な授業科目の開設状況
	順次性のある授業科目の体系的配置
	専門教育・教養教育の位置づけ
点検・評価項目(2)	4-2-2 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。
評価の視点	学士課程教育に相応しい教育内容の提供
	初年次教育・高大連携に配慮した教育内容
	キャリア教育の実施状況
点検・評価項目(3)	4-2-3 国際化に対応した教育を行っているか。
	教育課程における国際化の推進
	学生の国際交流（交換留学、海外研修等）の推進
点検・評価項目(4)	4-2-4 教育課程の適切性について定期的に検証を行っているか。
評価の視点	責任主体・組織、権限、手続きを明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させているか。

Ⅱ 点検・評価 対象期間は 2016 年 4 月～2017 年 5 月までとする。（教員数、学生数などのデータの基準日は 2017 年 5 月 1 日）

【点検・評価項目ごとの現状説明】

4-2-1	外国語学部は 2015 年度より新カリキュラムを導入した(A4-2-7)。以下では、カリキュラム改正の趣旨、および各学科の新カリキュラムを中心に述べる。 旧カリキュラム（2016 年度は 3、4 年生が履修）(B4-2-15) ではセメスター制を取り入れていなかったため、留学する学生の単位認定等に大きな不便が生じ、留学する学生数が伸び悩んでいた。さらに、特に英語学科では、旧カリキュラムの 5 系（英語・教育系、情報・コミュニケーション系、地域・文化系、英独系、英仏系）では十分に学生のニーズに応えかつ時代の変化に即応できなくなったため、また、学生の学科への帰属意識を高めるため、ゼミを 4 年間一貫制とした。 【カリキュラム改正の趣旨】 1. 中国語学科および英語学科では、全科目にセメスター制を導入することによって海外留学をより容易にし、留学する学生数を増やす。 2. 英語学科では、(1)英語スキルをより一層向上させ、(2)学生のニーズに合わせてより専門性の高い学びを実現させ、(3)きめの細かい教育により教員と学生との結びつきを強めて学科への帰属意識を高める。 3. 日本語学科では、高度な日本語能力を有する国費研修生受け入れを重視し、東松山設置の「日本文化特別演習 1・2」および日本文学科目にセメスター制を導入する。 ＜中国語学科＞ 中国語学科の特色は中国語の修得をその中核としながら、2 年次から「中国語・ビジネスコース」と「中国語・IT コース」のいずれかのコースを選択する点にある。これによって卒業時に「中国語プラスα」の技能を修得することで、中国語のスペシャリストとして社会で活躍できる人材を養成することを目指している（A4-2-7 p.38～p.44）。また、学生には中国・台湾での長期留学を奨励しており、留学先で取得した単位の振り替えを容易にするために、またダブルディグリー制度に学生がより参加しや
-------	---

	すすめるために、2015 年度より新カリキュラムに移行することで、すべての授業を半期完結のセメスター制で行うようにした。 2015 年度入学生からは、「全学共通科目」のうち 12 単位を卒業要件とすることによって、学生がバランスの取れた学問・教養を順次的・体系的に身につけることができるように配慮している。学生は卒業論文やゼミ論文の作成を通じ、問題を自ら発見し解決するアクティブ・ラーニングを行う過程で、社会に出て活躍する能力を身につけることができるようになる。 <英語学科> 英語学科は、1 年次に英語を中心に学ぶ英語コースと、英語とドイツ語（英独系）または英語とフランス語（英仏系）の 2 言語を学ぶヨーロッパ 2 言語コースに分かれている。英語コースは 2 年次からさらに英語学系、英語教育学系、地域文化学系、社会科学系、観光学系に分かれ、それに対応する専門教育科目が配置されている（A4-2-7 p.37～p.50）。 いずれのコースにおいても、1 年次は日本人教員とネイティブ教員の指導により基礎的知識の徹底習得を行い、2 年次は 7 つの系それぞれで充実した専門科目を受講開始し、3 年次はゼミを中心とした専門的研究で更に深い国際意識を醸成し、4 年次には 4 年間の集大成をゼミ論文や卒業論文として作成発表することになる。 従来行っていた TOEIC 試験による習熟度別クラス編成に加えて、TOEIC の一定のスコア取得によって評価する科目、TOEIC の一定のスコア取得を履修要件に加える科目を新設し、より主体的な学修を促す仕組みとなっている。 <日本語学科> 日本語学科は、日本人学生（日本語母語話者学生）と外国人学生（日本語非母語話者学生）が在籍し共に学ぶ学科である。日本語教育・日本文化を海外に発信する語学力を育成するため、1・2 年次で、外国人学生は日本語、日本人学生は中国語・英語のいずれかを必修で選択する（A4-2-7 p.51～p.57）。 カリキュラムは、1 年次から 4 年次まで、科目群として、「基礎演習系」「日本語学・言語学・日本語教育学系」「日本文学・日本文化学・比較文化学系」「専門演習系」の 4 つをバランスよく配置し、順次性と体系的に配慮した編成を行っている。
4-2-1	以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【 】内に○・×で記入し、○の場合はその内容と結果を記述してください。 （1）必要な授業科目の開設状況について【○】 具体的事例：2018 年度公開に向けてカリキュラムマップ、カリキュラムツリーの策定を行っている。 （2）順次性のある授業科目の体系的配置について【○】 具体的事例：2018 年度公開に向けてカリキュラムマップ、カリキュラムツリーの策定を行っている。 （3）専門教育・教養教育の位置づけについて【○】 具体的事例：2018 年度公開に向けてカリキュラムマップ、カリキュラムツリーの策定を行っている。
4-2-2	2015 年度より導入した新カリキュラムの学科ごとの配置状況は、以下のとおりである。 <中国語学科> 中国語学科に入学してくる学生は、入学時まで中国語学習の経験がないものが大半である。そのため教学効果の高い、体系的な授業配置が求められる。入学時の英語プレースメントテストによって能力別の英語教育を行っており、1 年次の「総合英語 1 A・B」「英語コミュニケーション 1 A・B」を必修科目とすることで、中国語と英語に通じた人材の育成を目指している。また、2 年次と 3 年次へ進級する際には、中国語統一試験の成績による能力別クラス編成を行っている。 1、2 年次の必修科目に「総合中国語」を配置し、中国語の「文型・語彙・会話」の基礎を固める。さらにリスニング能力向上のために、音声学習に特化した「CALL 中国語」も配置している。1、2 年次のこうした必修科目には、中国語既習者クラスが併設されており、中国語の学習経験のある学生にも対応している。2 年次にコースに分かれた後、「中国語・ビジネスコース」としては「ビジネス中国語」「中国語通信文」「中国語通訳法」等、「中国語・IT コース」としては「プログラミング」「IT リテラシー」「応用中国語電子ビジネス文章処理」等のコース選択科目が配置されている。 共通選択科目としては「中国語文法概論」「日中比較文化概論」「中国語コミュニケーション」「中国語文章表現法」といった、中国語の研究と実用の両面を考慮した科目が配置されている。また「中国語資格対策講座」を開講することで中国語検定試験の受験の一助としている。 学部共通科目としては「現地研修中国語」「インターンシップ実習」を配置し、留学やインターンシップを行った学生が単位を振り替えられる、国際化に対応した体制となっている。2016 年度より、国際交流センター主催のアモイ大学での研修に参加することで、「現地研修中国語」の単位を振り替えている（A4-2-7 p.76～p.77）。 ゼミは必修ではないが、ゼミを履修した学生は卒業論文やゼミ論文の作成を通じて、問題を自ら解決するアクティブ・ラーニングを行うことになる。 初年次教育については 1 年次に「教養基礎演習」が必修科目として配置してあり、大学で求められる知的作業の基礎を学ぶ（A4-2-7 p.30～p.36、p.58～p.61、A4-2-16、A4-2-19）。高大連携やキャリア教育については、特別な取り組みは行われておらず、今後検討すべき課題と言える。 教育内容の適切性に関する組織的な検証体制については、次年度のテキストの選定を担任会議で行うことで、学生に適切な教育内容を維持できるような体制となっている（B4-2-23 d2-表 19）。 <英語学科> 入学前教育として、推薦入学合格者全員を対象に e ラーニングを実施し、英語基礎力を補充することでスムーズな初年次教育

の開始につなげている。

基礎教育科目の必修科目として、英語の4技能（話す・聴く・読む・書く）を科目名に冠した「スピーキング 1A」から「ライティング 3B」まで 16 科目があるが、特長はライティングに関して 1 年次から 3 年次まで手厚く科目を配置していることである。これによりとくに発信力を強化することを狙っている。

専門教育科目の必修科目には、1 年次の「ゼミナール IA」から 4 年次の「ゼミナール IVB」まで配置されている。初年次のゼミナール IA・IB では、講義におけるノートテイキング、文献の検索、レポートの作成、プレゼンテーションなどにかかるスタディスキルズを中心に学ぶ。1、2 年次は基礎的な演習としてクラス指定、3、4 年次はより専門的な演習として学生が希望するゼミに所属する。ゼミナールは 25 名程度の規模であり、ディベートやグループ討論などのアクティブ・ラーニングが可能である。

同じく専門教育科目の必修科目として、「検定英語 1 AB～3 AB」を配置しているが、これらの科目は TOEIC テストの所定のスコアを取得することによる修得も可能である。専門教育科目の選択科目 A として、「アドバンスト・イングリッシュ 1 AB、2 AB」「スーパー・アドバンスト・イングリッシュ 1 AB、2 AB」があるが、これらは TOEIC テストの所定のスコアの取得を履修要件としている科目である。

専門教育科目の選択科目 B として、7 つの系（英語学系・英語教育学系・地域文化学系・社会科学系・観光学系・英独系・英仏系）に対応した多彩な概論科目と研究科目を配置している。「英語学研究 1 AB～7 AB」「英語教育学研究 1 AB～4 AB」「地域文化学研究 1 AB～8 AB」「社会科学研究 1 AB～3 AB」「ツーリズム研究 1 AB～3 AB」「ドイツ語圏地域研究 AB」「フランス語圏地域研究 AB」などである。

国際化への対応として短期、中期、長期の留学制度の充実を図っている。留学先はアメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ等である。ヨーロッパ 2 言語コースでは、教員が引率する短期現地研修（ドイツ・フランス）があるほか、長期の留学先として、英独系ではドイツ、英仏系ではカナダ（ケベック州）に派遣が行われている(B4-2-23 d2-表 15、d2-表 16)。

最後に、専門教育科目の自由科目として、「海外研修認定科目 1 AB～4 AB」を配置し、留学した場合の柔軟な単位振替を可能にしている (A4-2-7 p.37～p.50、p.58～p.61、A4-2-16、A4-2-19)。

新しい教育課程を 2015 年度よりスタートさせたが、その適切性については学生の状況を観察しながら、教務委員会を中心に検証を行い、継続的に改善に努めている (B4-2-23 d2-表 19)。

<日本語学科>

日本語学科は日本人学生と外国人学生が共修する学科で、このことは本学科の存在意義の重要な一つである(B4-2-23 d2-表 16)。考慮すべきことは、日本語が母語であるかないかということが、外国人学生にとっては学習上の困難点であり、同時に日本人学生にとっては教育上有益な刺激でもあるということである。本学科のカリキュラムで、外国人学生に対して 1・2 年次に必修の日本語科目を配して日本語力向上を図ることは、困難点の解決を目指したものであり、同時に、2 年次から「日本語特別演習」系列科目を 3 科目共修科目として配置したことは、日本語が母語である者とそうでない者が日本語を媒介として知的刺激を交わす場を、早い年次から設定したものである。同系列科目は、3 年次以降も 3 科目配置されている。また、3 年次に配した「日本語 3A」「日本語 3B」「日本語 3C」は、日本人学生と外国人学生の双方に対して、日本語教育的観点においても日本語を見つめる学習機会を提供している。

3・4 年次において、豊富な内容の「専門演習」(ゼミ)を提供している。教員の専門が多彩であることにより、以下の内容をゼミとして展開している。日本語学、応用日本語学、実験音声学・言語学、日本文学・日中比較文学、日中対照言語文化学、応用言語学、日本語教育学、比較文化学、日本語情報処理。これらは言語・文化を幅広く包括した内容を世界に発信できる人材の育成に寄与できる内容である。

初年次教育としては、必修の「日本語学基礎演習」が重要な役割を果たしている。専門資料の読み方、レジュメの作り方、口頭発表のしかたなど、上位年次につながる大学生としての学びの技法を教育している。教職実践における武蔵越生学校との交流、日本語学校における実習が近年継続されているので、これらを高大連携の方向に拡張する模索をしている。

キャリア教育については、全学共通科目と国際関係学部の「キャリアデザイン 1」「キャリアデザイン 2」に加えて、学科の専門科目として「キャリアデザイン 3」を開講している。アクティブ・ラーニング、PBL 型授業については、ディスカッション、グループワーク、個人またはグループでの発表がほぼすべての科目において、取り入れられていると言ってよい。講義形式の座学のみという内容は、今やほとんどないと言ってよい。国際化に対応した教育については、日本語学科の学生構成そのものが国際化の具現化した存在である。すなわち、学生定員の 3 分の 1 が留学生定員であり、1 年次から、語学関係以外の科目では、留学生と日本人学生が席を並べて学び、授業科目においても、「現代日本事情」「異文化コミュニケーション演習」「異文化コミュニケーション論」をはじめとして、日本とそれ以外の文化の違いを認識学ぶ内容の科目が開講されている (A4-2-7 p.51～p.61、p.58～p.61、A4-2-16、A4-2-19)。

初年次教育・基礎教育、キャリア教育の強化などについて、「学部教務委員会で学科間の調整を行いつつ検討し、実施する」という中期目標を立てているが、中国語学科が 2018 年度より新・新カリを実施することになり、英語学科、日本語学科における新カリ完成年度 (2019 年度) と 1 年のズレが生じてしまい、学科間における調整及び検討の実施は困難な状況にある。

4-2-2 以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【 】内に○・×で記入し、○の場合

	合はその内容と結果を記述してください。 （１）学士課程教育に相応しい教育内容の提供について【○】 具体的事例：中国語学科では 2018 年度より新カリを実施する予定である。日本語学科は 2019 年度カリキュラム改訂を計画している。 （２）初年次教育・高大連携に配慮した教育内容について【×】 具体的事例： （３）キャリア教育の実施状況について【○】 具体的事例：英語学科基礎教育科目において、2015 年度入学生よりキャリアデザイン演習 1A/1B を開講した。																														
4-2-3	・学部の国際化に関して、基本方針は定められていない。以下に 2012 年度～2016 年度の派遣と受け入れ学生数を示す。（2.6 ヶ月以上の期間を要する学生数とする。基準日は 5 月 1 日とする。） 過去 5 年間で、特に受入数が伸びないことが目立つ。日本語学科では中国からの留学生が減少傾向にある。留学生会館の整備と受け入れの態勢づくりが急がれる。 <table><tr><td colspan="2">2012</td><td colspan="2">2013</td><td colspan="2">2014</td><td colspan="2">2015</td><td colspan="2">2016</td></tr><tr><td>派遣</td><td>受入</td><td>派遣</td><td>受入</td><td>派遣</td><td>受入</td><td>派遣</td><td>受入</td><td>派遣</td><td>受入</td></tr><tr><td>55</td><td>21</td><td>59</td><td>7</td><td>49</td><td>17</td><td>37</td><td>21</td><td>38</td><td>21</td></tr></table> ・短期語学研修、学部・学科主催の海外研修等は以下のとおりである。 中国語学科： 短期：北京外国語大学短期研修（中国）、アモイ大学短期語学研修（中国）、インターンシップ（中国） 長期：私費留学（中国）、中国語学科協定校交換留学（中国・台湾） 英語学科： 短期：ドイツ語圏現地研修（ドイツ）、フランス語圏現地研修（フランス）、インターンシップ 長期：英語学科協定校交換留学（アメリカ、ドイツ）、英語学科中期留学研修（私費留学）（ニュージーランド） 日本語学科： 短期：海外日本語教育研修（マレーシア）	2012		2013		2014		2015		2016		派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	55	21	59	7	49	17	37	21	38	21
2012		2013		2014		2015		2016																							
派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入																						
55	21	59	7	49	17	37	21	38	21																						
4-2-3	以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【 】内に○・×で記入し、○の場合合はその内容と結果を記述してください。 （１）教育課程における国際化の推進について【×】 具体的事例： （２）学生の国際交流（交換留学、海外研修等）の推進について【×】 具体的事例：																														
4-2-4	教育内容の適切性については、カリキュラムの適切性と効果的な運用について、教務委員と学科主任が中心となって検討し、その提案をもとに学科協議会において改善している（B4-2-18、B4-2-23 d2-表 19）。一例を挙げれば、伝統文化を実体験できる「日本文化特別演習 1、2」の制度と内容の改善、留学生と日本人学生の共修日本語科目「日本語特別演習」系列の内容の充実、外部の日本語力検定試験の受検推進などを実現し、教育課程の編成・実施方針に基づき、学科目編成とその効果的な運用に腐心して、日本語学科にふさわしい教育を提供していると考える。																														
4-2-4	以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【 】内に○・×で記入し、○の場合合はその内容と結果を記述してください。 教育課程の検証に関する責任主体・組織、権限、手続きについて【×】 具体的事例：																														

【効果が上がっている事項】

4-2-1	・日本語学科において「必要な授業科目」の絞り込みを行った新カリキュラムが策定され、2019年度から実施される。 ・カリキュラムマップ、カリキュラムツリーの原案が作成され、授業科目、教育課程の可視化作業が進展している。
4-2-2	
4-2-3	
4-2-4	

【改善すべき事項】

4-2-1	・カリキュラム・マップの作成、カリキュラム・ツリーの作成など可視化を行う必要がある。 ・外国語学部は、2015年度から新カリキュラムを導入したが、語学力の向上を中心とした専門教育の目標設定と到達度の計測については、今後各種検定試験のスコアの状況等を精査しながら、制度設計をする必要がある。
4-2-2	・初年次教育・基礎教育、キャリア教育の強化などについて、学部内（学部教務委員会等）で学科間の調整を行いつつ検討し、実施する必要がある。
4-2-3	・外国語学部としての国際化の基本方針を定める必要がある。

4-2-4	
-------	--

Ⅲ 【達成目標】目標の進捗状況は、「S：完全に達成」「A：概ね達成」「B：やや不十分」「C：不十分」で、評価する。

達成目標		目標達成の指標となるもの	評価				
			2014	2015	2016	2017	2018
中期目標 (2014～ 2018)	4-2-2 ・初年次教育・基礎教育、キャリア教育の強化などについて、学部内で（すなわち、学部教務委員会等で学科間の調整をする）検討し、実施する。	・学科協議会、学部教授会の承認を得て強化体制が整備されている。	→		B	B	
	4-2-1 ・教養教育のコアとしての「全学共通科目」の必要単位数に関しては、今後の学部再編等によるカリキュラム改訂とともに8単位から12単位の間で実施する。	・学部の履修の手引きの中で、全学共通科目の必要単位数を明示し、教育課程におけるその位置づけが明確になされている。	→		S	S	
	4-2-1 ・学部・学科の特色を明確にしつつ、学生の自発的な学びを促すために、順次性のある授業科目の体系的配置を可視化する。	・授業科目と教育目標の関係を表として示したカリキュラム・マップの作成、授業科目間の系統性・連続性を図示したカリキュラム・ツリーの作成など、可視化に向けた具体策がまとめられ、履修の手引き等に記載されている。	→		C	A	
16年度 目標	4-2-2 ・初年次教育・基礎教育、キャリア教育の強化などについて、学部内（学部教務委員会等）で学科間の調整を行いつつ検討し、実施する。	・学科協議会、学部教授会の承認を得て強化体制が整備されている。			C		
17年度 目標	（対象期間は2017年4月～2018年3月） 4-2-1 ・学部・学科の特色を明確にしつつ、学生の自発的な学びを促すために、順次性のある授業科目の体系的配置を可視化する。 ・語学力の向上を中心とした専門教育の目標設定を行うとともに、到達度の計測について、今後各種検定試験のスコアの状況等を精査しながら、制度設計を行う。 4-2-2 ・外国語学部としての国際化の基本方針を定める。	・授業科目と教育目標の関係を表として示したカリキュラム・マップの作成、授業科目間の系統性・連続性を図示したカリキュラム・ツリーの作成を行い、可視化に向けた具体策がまとめられ、履修の手引き等に記載されている。 ・設定された目標が履修の手引き等に記載され、到達度についての検証結果がFD委員会等において報告される。 ・学部教務委員会等において検討され、教授会の承認を経たものが、学部ホームページ、履修の手引き等に記載される。				A	

Ⅳ 評価専門委員会所見

4-2-1【現状】2015年に学部全体で行ったカリキュラム改定の概要とその効果が具体的に示され、各学科の持つ特色が大変具体的に記述されています、

新たな取り組みに関し、（１）必要な授業科目の開設状況について、（２）順次性のある授業科目の体系的配置について、（３）専門教育・教養教育の位置づけについての三点についてすべて【○】がついており、その具体的事例が「2018年度公開に向けてカリキュラムマップ、カリキュラムツリーの策定を行っている。」と同一の記述となっています。確かにカリキュラムマップ／ツリーの策定は教育課程の検証、充実化につながりますが、具体的にどのように各項目につながるのかを示す必要があります。

4-2-2【現状】カリキュラム改定後、各学科においてどのようなカリキュラム配置が行われたのか、またどのように実効性ある教育課程となっているのか、詳細に示されており、多に評価できます。

4-2-3【現状】 具体的数値により留学に関する傾向が明示的に記述されています。

V 所見への対応

4-2-1【現状】現在策定中のカリキュラムマップ／ツリーに、「（１）必要な授業科目の開設状況について、（２）順次性のある授業科目の体系的配置について、（３）専門教育・教養教育の位置づけについて」が具体的、視覚的に具現できるよう取り組んでいきます。

VI 次年度への課題

本項目の根拠資料（データ類、裏付けとなる資料）

A4-2-7 外国語学部 経（履修の手引き）《既出》A4-1-9

A4-2-16 大東文化大学・大学院シラバス（CD-R）

大東文化大学ホームページ（Web シラバス）

<http://www.daito.ac.jp/campuslife/syllabus/index.html>

A4-2-19 平成 28（2016）年度 外国語学部時間割表

B4-2-15 2016 外国語学部 経（履修の手引き）

B4-2-18 平成 27 年度外国語学部教務委員会開催状況一覧表

B4-2-19 2015 年度学年暦

B4-2-22 平成 26 年度第 3 回 FD 研究集会のご案内 他

B4-2-23 大学データ集 《既出》B1-22

〔追加資料〕

日本語教育研修報告書 2014 年度・2015 年度